横浜市立 旭北中学校　　学校評価報告書　　（平成28～30年度）

重点取組分野	平成28年度 具体的取組	平成28年度 自己評価結果	総括
確かな学力	①夏期休業や定期的な学習会が計画的に行われることを保護者にも周知し、生徒が活用できるよう工夫します。 ②授業評価が定着し、分析が教科の枠を越えて組織的に行われ、授業にフィードバッグします。 ③教職員が図書館にある資料について確認し、学習および諸活動で活用します。	①学習会について保護者に周知できた。保護者の期待は大きいが、必要な生徒に活用されたとは言えない。②授業評価アンケートを2度行い、授業改善策を共有しあった。改善策をより具体的なものにすることが課題である。③学校司書が教育活動の内容に即した書籍を準備し、工夫して紹介しているが、それを十分に活用していない。	B
豊かな心	①学級活動や道徳、各教科の学習活動の中で、思ったことや感じたことを表現し、受け止めあう機会を作ります。②研修会等を通して、教職員の人権感覚・意識の向上をはかります。③代表委員会や新歓や三送会等に取り組む中で、活動の意義を感じさせます。またグリーンリボン運動等学校生活の課題を見つけ、その解決をはかる活動をします。	①生徒が他の考えを受けとめ、自分を振り返られるよう、授業改善を図った。②担当者が、教職員の人権感覚・意識向上を図り、機会あるごとに情報を提供し、「できること」から取り組むことを促した。③生徒総会で生徒会スローガンを決定させたが、それを具体的な取組に活かせなかった。グリーンリボン運動の形骸化が懸念される。	B
健やかな体	①体力テストの結果から一年を通じて体力の向上に努めます。 ②体育祭の長縄跳びを通して体力の増進や連帯感の高揚を図り、運動の喜びを感得させます。 ③授業の開始時までにランニング、補強運動を行い、持久力や筋力の維持・向上をはかります。	①体力テストは実施したが、結果の分析や授業へのフィードバックはできなかった。②4月から体育祭まで長縄跳びに取り組み、体力増進と共に、連帯感の高揚をはかることができた。③体力維持向上のため、年間を通して授業で行った補強運動は、特に運動系部活動等に所属しない生徒にとっては、貴重なトレーニングの機会となった。	B
児童生徒指導	①いじめアンケート（年4回）を継続して実施し、教育相談や小中児童生徒情報交換会を充実させることで、いじめをはじめとする生徒の抱える課題を早期に発見し、対応します。 ②あいさつ運動や休み時間などの機会をとらえ、積極的に生徒と接し、相談しやすい関係作りをします。	①アンケートにより一人ひとりの指導にあたることができた。休み時間の見守り活動で、生徒間の人間関係を把握し、いじめなどの予防につながった。研修などを通して全職員がいじめに対する考え方の共通理解を図った。②生徒と接する機会は増やしたいが、あいさつ運動は、その目的として効果的といえない。	B
特別支援教育	①小学校から引き継いでサポートできるような環境づくりの推進（個別の指導計画の引き継ぎ）をします。 ②定期的に情報交換を行い、配慮が必要な生徒について共通理解をはかります。 ③適切な支援方法やユニバーサルデザインについて研修を深め、各教科や学級で実践します。	①②小学校と情報交換やスクールカウンセラーも交えた定期的な会議を持つことができた。普段の指導に活かせてはいるが、その状況が係以外はわかりにくい。支援方法を探る上で、特別支援委員会に個別支援学級担任が入るとよい。③授業のユニバーサルデザイン化の研修を行ったので、具体的な行動を提案・提言し、実践につなげた	C
地域連携	①ブロック内の学校が同日に防災訓練を行い、防災拠点運営への協力を見据え、拠点校に小・中学生が参集し、地域の方と協働しながら、防災について考えます。 ②授業参観や体育祭では、重点的に取り組む内容をあらかじめ提示し、来校者に評価をしてもらいます。	①拠点校によって活動は様々だったものの、地域・学校にとって非常に良い取組であったと考える。個々の生徒の意識向上のためには、さらに日頃の指導が必要である。 ②重点的に取り組む内容を提示することができず、とくに何を見てもらうのかを示すことができなかった。	C
人材育成・組織運営	①授業力向上、学習評価、危機管理（いじめ等）、特別支援教育、人権教育など、実践力を高める研修を計画的に実施します。 ②経験年数の浅い教職員に必要な支援について、連絡会等を使い、常に話題にしていきます。	①研修計画はたてたものの、とくに人材を育成する視点で必要な研修を意図的に設定することができていない。学校の代表として参加している各研修の内容を、校内で共有できる機会があれば良い。 ②メンターの役割が、まだ各学年に任されているところがあった。	C
ブロック内相互評価後の気付き	メンター研修を運営委員会と並行しておこなっているとの話があった。10年ほど経験のある職員を中心に本校でも定期的に開催できるよう取り入れていく。 小中合同授業研究会では、小学校で行っている重点研に参加させてもらうことで、より深く研究された内容を研修することを期待できる。 小学校では学習意欲はかなり高くなってきているとの話があった。少なくともその指導について中学校で知っておき、その良さを活かしつつ、中学校の学習に移行させることを検討すべきである。		
学校関係者評価	体力テストを行うことが目的ではなく、それを読み取ってから何をするかが大切。特殊な技能ではなく、例えばラジオ体操などの基本をしっかりできるようにしてはどうか。読書は単なる知識を得られるだけでなく、課題を乗り越える力となる。様々な人物の考え方に触れることで、それを吸収したり、逆に批判的に考えたりしていると、人の話を聴き、自分の考えを持つ習慣や力が付く。読書や体力作りは学力をつけるうえでも必要なことだと思うが、対処療法ではなく、数年かかっても根本的に変えていく必要がある。		
学校経営中期取組目標振り返り	生徒の頑張りは学習活動や特別活動、部活動等の中で見えている。しかし、特に学習においては頑張りがまだ結果には表れてはいない。さらに充実した授業を行うため、子供の状況に即した具体的な改善策をうちだし、確かな学力の構築を図りたい。 生徒にとって、とりまく人間関係の中で互いの存在を認める切磋琢磨は必要であるが、未だ相手の存在を無視するいじめが認知されている。アンテナを高くし、早期の寄り添った対応を施すとともに、普段から自己肯定感や自尊感情を育てる取組を意識して、人権感覚の醸成を図りたい。		

重点取組分野	平成29年度 具体的取組	平成29年度 自己評価結果	総括
確かな学力	①授業評価や学状分析などから生徒の特性や現状をとらえ、主に授業で何をどのように伸ばすか、教育課程や授業の具体的な改善策を検討し、実践する。 ②学習会を継続するとともに、日ごろから定期的に学習を希望する生徒に機会を提供する。 ③教科、領域ごとに蔵書の利用計画を作成し、実践する。必要な図書資料については、計画的に整備していく。	①授業アンケートの結果を分析し、取組を設定してきたが、教科もしくは全体での共有に至っていない。②朝や放課後に補充学習を定期的に行った。③必要な蔵書は整備した。	B
豊かな心	①道徳をはじめ様々な活動で、自分の考えを表現し、他の人を受け止める機会を作る。また、振り返りを蓄積して、自己理解を深めさせるとともに、励ます評価に生かす。 ②生徒会スローガンやグリーンリボン運動などを具体的な取組として扱い、生徒の主体性を養う。 ③日頃の生活環境の整理整頓、対応修理、清掃などの維持管理について、まずは職員が率先して実践する。	①自分の意見を積極的に発表したり、他の意見にも耳をかたむけようとする姿勢が多く見られた。②生徒会スローガンについて、全校生徒で考えることができた。また、役員会・代表委員が主体となって、グリーンリボン運動を再検討し、生徒の主体性を伸ばすことができた。③毎月の点検の効率化を図った。夏季休暇中に職員清掃日を設け、重点化して清掃を行うことができた。	B
健やかな体	①体力テストの結果を分析、開示し、年間を通して補強運動に取り組む。生徒が体力向上を実感できるよう、単元ごとに体力テストを行っていく。 ②体育祭へ向けて、長縄跳びに継続して取り組む(一校一実践運動)。	①体力テストでは調査結果を生徒に返し、振り返らせた。また、体育の授業でも適切にトレーニングを取り入れた。しかし、全体で、強みと弱みを共有できなかった。②年度初めより長縄跳びに取り組ませ、体力増進とともに連帯感の高揚をはかることができた。しかし、体育祭後は、活動も下火になった。	B
児童生徒指導	①引き続きいじめアンケートを実施し、生徒の見守り活動で得られた情報を共有し知恵を出すことで、いじめの早期発見・解決に取り組む。いじめは許さないという姿勢を貫く。 ②普段から生徒とのコミュニケーションがとれるように意識し、教育相談も利用して、相談しやすい環境をつくる。 ③YPアセスメントの実施および活用方法を研修する。	①いじめアンケートから生徒が抱える問題を把握できた。学年や学校全体で情報を共有するよう生活指導部から促せた。②職員は学校生活の中で生徒とのコミュニケーションをうまくとれた。教育相談で生徒が相談しやすい環境を作れた。③YPアセスメントの研修を通し、対応まではできなかったが、生徒の気持ちの変化やクラスの状況を読み取れた。	B
特別支援教育	①特別な支援が必要な生徒についての引継ぎを組織的に行い、個別の指導計画や教育支援計画を作成・検証しながら、情報を共有して実践できるようにする。 ②ユニバーサルデザインなど、整然とした生活環境を実現し、維持管理を徹底する。	①各学年で特別な支援が必要な生徒について、教育支援計画や指導計画を作成し、学習支援を行った。②各教科ですべての生徒にわかりやすい授業の展開を意識できた。学習を支援する教室を増やし、整備することができた。	B
地域連携	①防災拠点開設運営訓練や地域行事参加などでは、動機づけを計画的・重点的に行い、地域と協働したり、自己有用感を高めたりできるよう指導していく。 ②学校の情報開示を一層進める。 ③授業参観などで、具体的な評価項目による参加者の評価を実施し、指導の改善につなげる。	①防災拠点訓練では地域の会議に参加し、円滑に行われるよう努力した。アンケートから、地域の一員としての意識は低いことが分かったため、この訓練は地域連携の一つとしてとらえ、他の地域活動への参加も織り込んできたい。②各種たよりや予定表などをHPに載せ、学校だよりの内容は生徒の活動が見えるようなものにした。③授業参観週間でのアンケートをまとめ、教科に示した。	C
いじめに関する項目	①「子どもの社会的スキル横浜プログラム」を授業や学校行事の場面で活用し、子どもの安全・安心が保証される場を作り出す。 ②生徒一人ひとりの状況についての記録を作成し、いじめ防止対策委員会を中心に、組織的にいじめ事案の予防及び早期発見と適切な対処・措置・支援を進める。	①YPアセスメントから生徒の気持ちの変化やクラスの状況を読み取ることができた。しかし、いじめが起きにくい学級集団の形成にむけて横浜プロフラムを利用するなどの取組には至らなかった。②いじめについて学年ごとに記録を残し、いじめ対策防止委員会で共有できた。全体でも危機感をもって、組織的に対応しようとする意識ができた。	B
人材育成・組織運営	①教生用の講話にも若手職員が参加したり、経験の浅い職員から研修内容を提案したりするなど、メンター研修を2か月に1回は実施する。 ②各研修や活用可能な資料を分野ごとにPDF化し、サーバー内に保管して共有する。 ③各職員がキャリアステージを意識して目標を設定し、実践する。 ④風通しの良い職場となるよう各自が務める。	①メンター研修と運営委員会とを並行して行うと5年、10年次の職員や学校の運営に関わる職員が加われない。②キャリアステージを意識して目標設定し、努力をしているが、日々の業務に忙殺され、振り返りまで至らない場合がある。③互いにコミュニケーションをとり、情報を全員で共有し、より良い方法を模索することができている。	C
ブロック内相互評価後の気付き	●読書をうながすために、授業の学習内容に応じた図書や資料を、教室周辺におくことが考えられる。.●学習内容を定着させるため、家庭学習をうながすよう課題を与えることも考えられる。●論理的に思考し表現する力をつけるために、小学校で指導しているイメージ図や話型は共有する価値がある。●タブレットの利用についてブロックで可能性を探っていけると良い。●子どもの社会スキル横浜プログラムの利用がブロック共通の課題となっているため、その方法を共有できると良い。		
学校関係者評価	①各種調査結果や分析を小学校に共有してもらい、課題を探してもらったり、自校の指導に生かしてもらう。中学校でも連続した指導を行うとともに、地域にもその内容を発信して欲しい（例　新聞や本を読む習慣についての指導）。 ②夏季休業の終わりに学習支援等をおこない、登校への気持ちの切替をはかり、不登校を防ぐことが考えられる。 ③合唱コンクールなどの後は、生徒はお互いを理解し、まとまりが出ているはずである。その力を再度生かす機会を与えてはどうか（例　大縄跳び大会）。 ④教育相談をはじめ、生徒の話を聴くことで、生徒は自分の良さや努力を認めてもらえたと実感する機会にできる。 ⑤地域でも中学生に有用感を持たせる機会をつくる必要がある。		
学校経営中期取組目標振り返り	小中学校で指導されてきた中学生の課題が明らかになってきた。中学校ブロックで共有し、それぞれの課程でどう指導していくのか。学校・家庭・地域の連携役割について整理する時期に来ていると思われる。小中学校における指導の系統性について、共通理解をもって実践する必要がある。		

重点取組分野	平成30年度 具体的取組	平成30年度 自己評価結果	総括
確かな学力	①学状や授業アンケートの結果をブロックで共有し、授業の中で工夫できることを検討、実践する。 ②部活動や会議の設定方法を工夫し、定期的な放課後の学習支援時間を確保できるようにする。 ③朝学習を試験的に取り入れ、学状や学校評価アンケート等の結果をふまえて、検討する。④引き続き、必要な図書資料を計画的に整備する。		
豊かな心	①道徳科では、生徒が自己に置き換えられる題材を選び、蓄積した振り返りを自己改革につなげる。②生徒会スローガンを代表委員会で取り上げ、各委員会での活動につなげる。グリーンリボン運動により、引き続きいじめの防止を意識できるよう内容を検討する。③地域からの要請によるボランティアの対応を進める。④継続的に全体を見渡し、他の分掌とも連携して、校内の生活環境の維持管理を行う。		
健やかな体	①体力テストの結果や生活の仕方の傾向や課題を共有し、様々な取組の中で意識して指導できるようにする。②一校一実践運動である大縄跳びは生徒の練習への意識が高まるよう指導を工夫するとともに、体育祭後も取り組むことができるよう授業計画をする。また、各組織にも雰囲気づくりへの協力を依頼する。		
児童生徒指導	①いじめアンケートを継続し、日々の情報とともに全体で共有し、適切な対応や指導等に繋げる。②生徒とのコミュニケーションをとり、相談しやすい環境をつくる。③SNSによるトラブルの多さから、コミュニケーション能力の向上に努める。④スマホ利用の時間が多く、学習、読書、睡眠時間が少ない生活習慣の改善を促す。		
特別支援教育	①夏季休業前までに支援が必要な生徒への指導ができるように、計画の作成や見直し、引継ぎや情報共有がより早く正確にできるようにする。②各教室におけるユニバーサルデザインについて、黒板の周りや日々の予定掲示の明確化など、整然とした教室環境の実現を目指して教職員の共通理解を進めてい		
地域連携	①防災拠点開設運営訓練の事前指導で、生徒が災害を身近に感じ、地域の方と協働できるよう、動機づけを計画的・重点的に行う。また、防災・減災意識が高まるよう家庭向けにも情報発信や訓練参加を促す。②中学生の地域活動への参加を促すよう努力する。③情報発信のツールとしてHPを有効に活用する。④参観者による授業アンケートを行い、学校の状況を共有するとともに、授業改善に役立てる。		
いじめに関する項目	①計画的にYPアセスメントを実施し、引き続き、活用方法の研修を行う。横浜プログラムについて理解を深め、各学級により適切な指導を行う。②記録のフォームを統一してさらに共有しやすくし、年度途中はもちろん、年度の切り替え時にも正確に引き継がれるようにする。③スクールカウンセラーのみならず特別支援委員会や関連機関との連携をはかる。		
人材育成・組織運営	①メンター研修を、誰でも要請に応じて参加できるように設定し、主体的な運営ができるよう定着させる。②目標設定および実践後、改善のための評価を行えるように会議・研修時間を確保する。③風通しのよい職場である強みを生かし、要点を押さえた報告や確実な連絡、処理しきれなくなる以前の相談ができるようにする。④働き方改革を進める。		
ブロック内相互評価後の気付き			
学校関係者評価			
学校経営中期取組目標振り返り			